
恋愛ドラマ

May

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛ドラマ

【Nコード】

N4319B

【作者名】

May

【あらすじ】

私は決められたレールの上をいつも走っていた。憧れは、自分の道を進むこと 『恋愛』シリーズ第二弾！

今まで、現実^{リアル}的な恋愛なんて、したことがなかった。

たまたま生まれた家が、代々俳優をしてきた家系で、しかも全員が誰もが名前は聞いたことはあるという、有名な俳優だ。

お爺ちゃんもお婆ちゃんも、お父さんもお母さんも、お兄ちゃんも、さらには妹までも、有名な俳優。

当然私も、そんな家系の一族の一人なのだから、ある程度は有名な俳優だ。

けど、楽しくなんかない。

それが理由で、学校の誰もが私をからかい、虐め、嘲笑っていた。それが嫌で、小学校の高学年になって、私は学校に行かなくなった。

本当は、俳優じゃなくて、美容師になりたかった。小さい頃、いつも私の髪を切ってくれる美容師のおねーさんに憧れて、私は、美容師になりたいと言った。

けれど、親族がそれを許してはくれなかった。当然のことだ。当然といえば、

結局私も、俳優としての道を歩むしかなかった。

言わば私は、親の決めた『人生という名のレール』を走る『電車』なのだ。

悔しさを紛らわすために、私は演技に没頭した。けれど、いいことなんて、一つもなかった。

ファースト・キスも、演技だった。

肌を見せたのも、カメラの前だった。

私の人生は、常に演技だった。

恋愛ドラマのヒロインを演じた時も、感情移入なんて、一切なかった。

だから、演じている私を見て、泣いたり、感情移入している人達

を見ると、馬鹿らしく思えてくる。

俳優という名の『仮面』をかぶっている私は、本当の自分を表に出さない。

演技の世界になんて、素の自分は必要ない。

いつか、この仮面を外し、心から好きな人と、自分自身を見せ合える時が来るだろうか？

恋することは、いつになったらできるだろうか？

しばらくして、恋愛ドラマで主演をすることになった。

相手役は、私と同年の高校三年生の男の子。どっちかというと、顔はかわいい系。

撮影の合間に、その人が言ってきた。

「一体、何を我慢してるの？」

この人は、全てを見据えてる。
私の仮面で隠している素顔を。

「恋愛ドラマの主役なのに、全然感情移入をしていないじゃないか」
監督じゃあるまいし、何であの人に、そんなことを言われなければいけないんだろう。

「それじゃあ、いつまで経っても、一人前の俳優にはなれないよ」

「あんたに、何がわかるのよ」

つい、口走ってしまった。

「私はあんたみたいに、好きで俳優の道に進んだんじゃない」

止まらない。一度話し出すと、止まらない。

「私は生まれた時から人生が決まってて、なりたい職業にも就けなくて、いつもいつも、親が私の生き方を決めて！」

他人に、私の気持ちなんてわからない！

「逆らったりしないの？」

それができたら、もっと前にやっている。でもそんなことをしたら、一族の恥と、好き勝手言われ、いずれ一族を追われる。

「じゃあさ、俺の前だけで、本当の君を見せてよ？」

何で、そんなことを言うの？

「俺、君に憧れて、俳優になったんだ」

そんな、ドラマみたいなことがあるわけがない。

「元々演劇部で演技しててさ、友達に見せてもらったドラマで、初めて君のことを知ったんだ」 きつと、この人は嘘をついているんだ。私を騙して、私の本性を暴いて、裏で笑うつもりなんだ。

「演技は繊細なのにさ、どことなく、寂しそうな目をしてて、何でそんな目をしてるんだろって、思ったんだ」

聞きたくない。そんなこと、聞きたくない。

「俺と付き合ってみない？」

これが目的なんだ。有名な俳優と付き合って、それで自分も有名になろうって魂胆こんたんだ。

「考えといてよ。あと、メルアドも、交換しない？連絡取る時、便利だしね」

何でこの時、メルアドを交換してしまったんだろうか。

内心、どうでも良くなっていたのかもしれない。親の引いたレールを、脱線して進んでみたかった。

メルアドを交換した日の夜、早くもアイツからメールがきた。

『From・雅也君まや』

Subject・さっそく

早速メールしちゃいました。迷惑でしたか？
迷惑。

『でも、俺は嬉しくてしょうがありません。ずっと憧れてたあなたとこうして、お話できるなんて、夢のようです』

一生、夢見てろ。

『突然ですが、日曜日にデートしてください』

……はあ？ 突然何を言ってるの、こいつは？

『今度の日曜の午前十時に、ハチ公像の前で待ってます。絶対に来て下さい』

絶対って……。 何様のつもりだよ、アイツ。

行くつもりなんかなかった。 本当に、行かないつもりだった。アイツなんか、待ちぼうけさせればいいと思ってた。

けど、ベッドに入って、目をつぶると、ハチ公像の前で待ちぼうける、アイツの姿が浮かんできた。 どうでもいいはずなのに、アイツのことなんて。

なのにどうして、アイツの言葉や、顔が浮かんでくるんだろう。

……来てしまった。

行かないつもりだったのに、しかも時間より十五分も前に。

「来てくれたんだ」

不意に、アイツの声がした。

「来ないかと思ってたよ」

アイツは、ハチ公像の裏から、ひょっこりと顔を覗かせた。

「嬉しいよ、来てくれて」

「ひ、暇だったから来ただけよっ！」

素直になれないのが、私の本当の性格。すなわち、仮面の中の顔。

つい、表に出してしまった。

「行こう」 アイツは、勝手に私の手を引いて、歩き出した。

この気持ちはなんだろう。

心の中で、何かがモヤモヤとしている。

煙が渦巻くように、心の中で踊る。

「ここね、俺のお気に入りの場所なんだ」

「って、古本屋じゃん！」

アイツが私を連れて行った場所のは、古ぼけた古本屋。 何でこんなところがお気に入りなんだか。

「入ろう」

古ぼけた外見と同じく、中も古ぼけていた。
奥の会計場には、お爺さんが一人いた。

「あのお爺さん、俺が小さい頃から知ってる人だから」

てか、これってデートですか？

私は取り敢えず、新刊コーナーと書かれたプレートの場所に行ってみた。 何と、三日前に発売されたばかりの私が好きな作家の本もあった。

「ここ、品揃えいいし、新刊とかもすぐに入るから、結構便利なん

だよ。ま、楽しんでよ」

値段を見ると、何と半額。しかも新品同様で、帯び等もしつかりと付いていた。

「どれ？」

勝手に本を取り上げてきた。

「ふーん、こういう本が好きなんだ」

「悪かったわね、私がファンタジーなんか読んで！」 恥ずかしい。アイツなんか私の好みを知られるなんて、顔から火が出そうな程、恥ずかしかった。

「買ってやるよ、これくらい」

えっ？

「お爺さん、これ下さい」

アイツが勝手に買ってくれた本は、『ふぁんたちつく・たいむ』
といって、突然時空を越える力を手に入れてしまった少女が、別の

次元から来た敵から逃げて、時空を旅していく話だ。

「今度、俺にも読ましてよ」

男が読んだって、面白くもないのに。

そのあと、適当にいろいろ廻った。

アイツがいく場所は全て、珍しく、新鮮だった。

「好き」

帰る時、アイツはそう言った。

「君のこと、好き」

まだまだ、恋愛対象なんかには見えない。

でも、私は、決められたレールから少しずつ、離れ始めていた。

「友達からだったら、いいよ」

その時、アイツははにかむように、

笑った。

私は初めて、決められたレールから外れて、自分の道へと進んで
行った

F i n

（後書き）

どうも、Mayです！『恋愛ドラマ』、いかがでしたか？これは一応、『恋愛小説』と関連して、『恋愛』シリーズとして書いたものです。これからも、『恋愛』シリーズを書いていきたいです。では。
2007・1・23、再び深夜の自宅にて。 P・S、評価や感想も下さい。May。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4319b/>

恋愛ドラマ

2010年10月10日03時34分発行